

附 錄

一 誓言方言

校補但馬考に但馬の方言誓言輯錄せらる。されど尙遺漏無きにあらず。左に之を掲ぐ。尙脱漏せるもの多し。後日を約す。

(注意。校補但馬考と重複せるもの及品詞の分類當を得ざるものあらん。幸諒焉)

一、名詞

○「ついこばい」。又は「つりこばい」

鞦韆なり。

○「えゝによば」。又は「えゝねば」

既婚未婚を問はず、總ての美人に通じ用ふ。蓋し「よい女房」か。

○「がつてんさん」

月なり。

○「ひんだ」

女兒を卑しみて言ふなり。

○「びくに」

右に同じ。比丘尼なり。

○「こうくわんばち」

合歎の木を云ふ。「ばち」を付するは如何なる意か。

○「りく」

理窟の略なるべし。吾損になる事を「りくが悪い」など云ふ。

○「であじん」「だんじ」「だんじん」「だいじん」

皆虎杖を呼ぶ語也。

○「ふぬけ」

馬鹿又は喪心せる人を云ふ也。腑抜か。

○「むしくし」「いもくし」

痘痕なり。「あばた」なり。

○「ぎあき」

外氣なるべし。風邪を云ふ。

○「じよくなれ」

蓋し「常慣れ」か。總て習慣性のことを云ふ。

○「さるし」

晒し木綿を言ふ。

○「れんぱう」「れんわ」「らんぱん」「らんど」

電報、電話、談判、煖爐なり。總て「だ、で、ど」は「られ、ろ」に發音するゝ場合多し。

○「こびる」或は「こびるま」

朝飯と午餐の中間の食事なり。

○「いんごろもち」

米の粉にて作りし餅也。

○「こつこ」

子供の語 下駄を言ふ也。

○「うり」

折りの訛か。例之「そのうり」「あのうり」など用ひらる。

○「そうれん」

葬禮なり。

○「よぼしぎ」

鳥帽子着なり。冠禮。

二、代名詞

○「とつつかん」

父を呼ぶ語。

○「ぢさ」「ばさ」又は「ぢさま」「ばさま」

祖父祖母。一般に翁嫗にも通じ用ふ。

○「わいら」

汝等。

○「てあい」又は「てやあ」

輩の意なり。

三、動詞

○「はりこはる」軽き病氣をなす時に用ひらる。例へば「某は此頃はりこはつとる」。

○「かく」書く又は搔くに非ず。纏ふ意味に用ひらる。例えば「まわしをかく」。

○「うせる」来る。口汚く言ふに用ひらる。

○「なやむ」 玩弄の意味。

○「はやす」 蓋し配すの義か。例えは「もうお客様が来んさるでお膳をはやすかイ」。

○「ちようける」 猫兒の戯るゝ事より轉じて兒童が成人に狎れ戯るゝに及び、更に親しき友の軽き惡口にも用ひらる。

○「しやれる」 洒落の意味より更に、人の惡口に對して「しやれない」又「しやれとる」など。

○「しやべくる」 饒舌、喧嘩。

○「あんじる」 心配。

○「なせくる」「なでくる」 撫である。

○「さらす」 極めて卑しき語なり。「爲す」なり

○「さるす」 洒らす事なり。

○「ほせる」「ほせくる」 掘ること也。

○「ほうてる」 戲れ騒ぐこと也。

○「うつぶく」 倦す。

○「くるぶく」 右に同じ。

○「あげんす」 物を他に與ふること也。

○「くんねあせ」 下さい。

○「なやす」 返す。

○「なつべる」 藏す。

○「さらかふ」 逆らふ。

○「ひようげる」 戯談を言ふ。

○「あだける」 落ちる。

四、助動詞

○「くさる」 侮蔑する語也。例之「行きくさる」〔去にくされ〕

○「わいな」 例之「行くわいな」「来るわいな」。

○「わいや」 右より一層卑しき言ひ方也。

○「ないす」 例之「行きないす」「來ないす」

○「ないた」 右の過去詞なり。

五、形容詞及副詞

- 「ねつい」 頑強、剛岸。又「ねえつう」と副詞的にも用ひらる。
- 「こばやのかわ」 朝早くの意也。
- 「えらい」 疲れし時、病氣の時、苦しきを言ふ。
- 「やだつちや」 嫌だよ。嫌だと云ふに。
- 「えだあ」 嫌だ。
- 「ぼうろ」 蓋し殆どか。
- 「ぼうど」 全く。
- 「よつぼろ」 餘程。
- 「あいたてもなげに」 他家より多くの贈品を受けし時「あいたてもなげにようけおくれんさつて」など用ふ。蓋し^あきたる手も無き程の意か。
- 「であに」 大いに。
- 「ちいたて」 少しづゝ。
- 「ようけ」 澤山。
- 「へうかん」 蓋し慄悍なるべきも、洒落の意味に用ひらる。
- 「いごく」 老人の動作懶げなるを言ふ乎。

六、助詞及其他

○「であん」 例之行つたらどうですであん

○「きあん」 例之居りますきあん

○「へつあ」 他家を訪ふ際戸口にて「今日は」と云ふべきを「へつあ」。

○「さやなら」 左様なら。

○「……とこといや」 例之父が子に「もう寢とこといや」。蓋し大いに意味を強調する際に用ひらる。

○「いつこう」 一向乎。

附 言

方言訛言は到底其發音を正確に表し得ず。又近來青年女子間の語に殊に著しき變化あり。用語の根本的變格に非るも、大に注目すべきものあり。例之

○あんた昨日何處へ行つとつたん。

○丹後からもどつたん。

○あの人は何しとるん。

等の如し。

二 忌事、俗信、及禁厭

(注意) 忌事、俗信及禁厭等類別せず。雑然たれ共、讀者幸に諒せよ。

- 庚申の直前に就擣したる病人は早く治し、直後に就擣せる病人の癒えるは遅し。
- 月末に就擣せる病人は月初に病みたるもの遅し。
- 庚中の有る月には着帶式をなすべからず。
- 蜂に刺された時には歯くそをつける。
- 火傷には飯粒をつける。
- 火傷には灰をつける。
- 火傷には胡瓜の瓢ヒラメをつける。
- 頭痛には葉蘭の煎薬。
- 枕を亂暴に取扱ふと頭痛を病む。
- 庚申の日に七ヶ所の庚申に參詣すると六十日間無病息災也。
- 庚申の夜には交媾すべからず。此夜に妊娠せる子供は盜人となる。
- 庚申の日に生れたる子には金屬に因める名をつくべし。
- 節分の夜桑の木の火にあたれば無病息災也。

○熊を殺すと國中の五穀不作。

○人が失神せし時屋根棟に上り大聲に其人の名を呼ぶと必ず蘇る。

○妊娠中に袋物を縫ふと袋子を生む。

○妊娠中禦をかけた儘便所に行くとたすき子を生む。

○禦をかけて御飯を食べると無限に食ふ。

○お産の時等の神様は一番先きに助力に來て下さるから、女は平常等をまたぐべからず。

○各人の守り本尊左の如し。

子一千手觀音

丑虛空藏菩薩

寅文殊菩薩

卯普賢菩薩

辰已

午勢至菩薩

未
大日如來

酉
不動明王

戌
八幡菩薩

○金藏寺山には三本足の狐がある。

○十二支中前半の年に宿れる牛は値高し。

○舊四月三日に雨ふれば豊年也。

○雪は月夜に多く洪水は新月に多し。

○未の日及未の年には火事多し。

○硯を洗ふと雨が降る。

○如布神社鳥居前の戸垣さんの手水鉢を攪拌すると雨が降る。(此例頗る多し)

○針を粗末にすると死後針の山に上らせらる。

○蠶豆の皮をむいて食ふと死後石の皮をむかねばならぬ。

○蛇の死骸を埋葬してやれば幸福を惠まる。

- 姪娠の時に火事を見物すると癌のある子が生れる。
 - 鼻に瘤物が出来ると親戚に子が生れる。
 - 鳥の啼聲を真似すると灸をする。
 - 食餌の時落ちた飯粒を拾つて食べぬと盲目になる。
 - 夜鶏が啼くと不幸事がある。
 - 鶏が啼くと死人がある。
 - 雪やけには人蓼をすつてつける。
 - 途中大便を催した時には、此土地の砂を三粒拾つて歩くと暫時辛抱が出来る。
 - 目ぼが出たら、笊を以て恰も目ぼを掬ひる如くにして忽ちに伏せると癒る。
 - 眼中に異物の入つた時は
- 眼の神さん／＼大きな／＼大杓子で眼の中の異物をポイと出しておくれんさいと三返唱へると癒る。
- まむしに咬まれた時、其まむしを殺すと忽ちよくなる。
 - 子供が頭其他を柱などに打ちつけた時には唾液をつけて「親のつば／＼」と云へば治る。

- 耳がかゆいと近日中に善い事がある。
 - そげをぬくには蟹の死骸と御飯をねつてつける。
 - 蛇を指さすと其指が腐れる。
 - 夜爪を切ると發狂する。
 - 爪を火にくべると發狂する。
 - 耳くそを食べると怜利になる。
 - 小豆飯に味噌汁かけて食べると嫁入に犬が吠える。
 - 足袋を穿いた儘寝ると親の死に目にあはぬ。
 - 一月二日の夜紙で舟をたゝみ、一富士二鷹三茄子とほのぐと明石の浦の朝霧に
- 島隠れ行く舟をしそ思ふ
- の歌を書き床の下に敷いて寝ると善い初夢を見る。
 - 風呂の湯で火を消すと火事が起る。
 - 生れた子の足に二ツ「くくり」があると次の子は女の子、一つなれば男の子。
 - 便所の掃除をすると美しい子が生れる。

- 刃物をまたけると、身體の何處かに傷が出來る。
- 摺鉢に入れた御飯を獨食べると摺鉢子を生む。
- 土用の丑の日に海に浸ると無病息災。
- 申の日には衣類を裁つべからず。
- 尻の長い客を去なすには
- 煙管を障子の「サン」にかける。
- 其客の下駄の裏に灸をする。
- 等に頬冠りをさせる。
- 足指(趾)の麻痺れた時には、坐つた儘額を疊につけると癒る。
- 子供の歯がぬけたら上歯は床下に捨て下歯は屋根に放りあぐべし。
- 子供の歯がぬけたら「鼠の歯」と云つて捨てる。
- 庚申の翌日灸をするると六十日間無病息災。
- 葬式に死者に供へたる菓子を人知れず食せば臍病が癒る。
- 此外某所には夜赤茶瓶が下がる、ウシオニがある。小豆洗ひがある等の類頗る多し。

昭和九年十二月二十五日印刷
行

【非賣品】

兵庫縣出石郡資母村役場内

編行纂兼 田 誠 一
代表者 太

京都市油小路正面
上ル

印刷者 清 水 東 川

印刷所 内外出版印刷株式會社

平成二年三月三十一日復刊

發行者

兵庫縣出石郡但東町出合

但東町教育委員会

印刷人

兵庫縣出石郡出石町田結庄八六

嶋屋印刷

發行所
兵庫縣出石郡資母村

資母村役場

發行所
兵庫縣出石郡但東町出合
但東町役場

電話〇七九六一五四一〇三〇一一番

復刊資母村誌

資母

村誌

正誤

表

一一
二〇九七八六五五二四四三三二八二三
〇八八八七五六一三二二一一九三三二八三
目錄頁數

一二一
九四五二六三四三四一二一九四五五六二
行數

出吉 祭正橋金[○]今[○]二三[○]浪[○]年[○]本十[○]七[△]宮[○]
石祥 保本殼[○]井[○]甚[○]願[○]行[△]ノ正[○]
郡[○]日[○]禮[○]号[○]衛[○]品[○]衛[○]月[○]寺[△]次[△]本[△]

出吉 祭正橋金[△]橋[△]二之[△]波[△]本[△]一[△]官[△]
石祥 保本物[△]本[△]顧[△]誤[△]
府[△]目[△]札[△]中[△]術[△]品[△]笠[△]年[△]寺[△]本[△]

任

挿

せ[○]

入

て

に[△]
よ[△]
り[△]
て[△]

削

除

五三三四二二一九五〇〇五三二二八四四〇九行數

産當產厨 現稻大 塵乞九[○] 其關首^{○亘}宗
靈[○]寺[○]靈[○]子 粱[○]正[○] 銘右 想[○]々[○]衛 正
神 神 子 住[○]長年 空日門 音[○]榦[○]座り鏡[○]
社も社に[○]

其關智^{モト}宗^{ムニ}誤
塵乞九^{ムカシ}
銘右^{メイシ}
之衛^{ミハヤ}
青^{シオ}振^{ツバキ}座^{シテ}り境^{シキ}
現稻大^{タケヒコ}
類^リ之^ミ衛^{ハヤ}
在^{シテ}長^{ナガシ}年^イ
空日門^{スカマツル}

日	日 [○]	大德第一座證道	賜	
完			は [○]	挿
弟	寮		り	
子 [○]			て	入
也	代			

削

除

三 三 三 三 三 三 二 二 二 二 二 二 二 三 三 三 三 一 頁
四 四 三 三 〇 〇 七 六 七 六 七 八 六 八 六 八 三 五 七 五 數

九 三 〇 一 七 八 一 一 五 四 一 〇 一 一 二 一 一 一 行
一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 數

松 同 人 九 對 [○] 胡	日 露 戰 役	林 想 [○] 自 [○]	女 他 [○]	
本 坐 [○] 月 瓜		鼎 ふ べ	房 は	正
宗 [○] 九 [○]		適	有 [○] 是	
吉 月 間 [○] 日 象 も [○]		一 [○] し 身	之 れ	

松 同 人 九 現 [△] 胡	日 露 戰 後 [△]	林 推 [△] 水 [△]	女 地 [△]	
本 座 [△] 月 瓜		鼎 ふ べ	房 は	誤
定 [△] 五 [△]		適	相 [△] 是	
吉 月 間 [△] 日 象 と [△]		藏 [△] し 身	之 れ	

大 正 五 年 七 月 五 日	謂 平 民 ら [○] 的 [○] 宗 教	非 挿 さ [○] 入 る
-----------------	---	------------------------

す [△] 全 行 削 除	唐 川 村 [△]	削 除
------------------------	--------------------	-----